

# 寺尾隆吉選・邦訳で読むラテンアメリカ文学の20作、プラスワン

## 1 | リアリズム文学の伝統

### ◆マシャード・デ・アシス

リアリズム文学の伝統

『プラス・クーバスの死後の回想』(1881) 国際語学社

これこそ知る人ぞ知る、現代ラテンアメリカ小説の原点。19世紀ブラジル文学最高の作家マシャード・デ・アシスは、バルザックやフロベール、ディケンズのリアリズム文学を継承しながらも、独特のウィットとユーモアを込めて世紀末のサンパウロブルジョア社会を描き出していく。短編小説でも面白い作品を多く残しているが、彼の持ち味が存分に発揮されたのは『キンカス・ポルバ』、『ドン・カズムーロ』、そしてこの『プラス・クーバスの死後の回想』から成る長編三部作。特に本作は会心の出来といえるだろう。自分の死体を食べ始めたウジ虫に捧げるというビックリ仰天の献辞を端緒に、未来のない不倫関係の深みにはまって挫折した悲しい生涯を回想する主人公の姿は、閉塞感に満ちた社会の退廃を浮き彫りにする。内容もわかりやすく、ラテンアメリカ小説は初めてという読者には格好の手引きとなるかもしれない。

### ◆カルロス・フエンテス

リアリズム文学の伝統

『澄みわたる大地』(1958) 現代企画室

『ペドロ・パラモ』と並び、メキシコ文学の双璧を成すのがカルロス・フエンテスの『澄みわたる大地』。死者の沈黙に貫かれた静的世界を描き出した『ペドロ・パラモ』に較べ、こちらはメキシコ・シティの拡大とともに次から次へと登場人物を繰り出すダイナミックな小説。思春期を海外で過ごし、「余所者のメキシコ人」としての視点を身につけたフエンテスは、アイデンティティ探究の機運に満ちた1950年代に帰国して以来、メキシコ探求にとりつかれてしまった。多様な人種と階級がごったがえすメキシコ・シティを背景に、フエンテスは最新の文学的手法を駆使しながらメキシコ社会の人間模様を描き出していく。バルザックの「人間喜劇」を無理やり一冊にまとめたようなこの作品、読後には一世界の盛衰を見渡した清涼感を残してくれる。

### ◆マリオ・バルガス・リョサ

リアリズム文学の伝統

『都会と犬ども』(1963) 新潮社

それまでまったく無名の作家だったバルガス・リョサは、本作『都会と犬ども』によって権威あるビブリオテカ・ブレベ文学賞を受賞し、世界的作家の仲間入りを果たす。暴力に満ちた邪悪な物語世界、斬新な形式、練り上げられた文体、どれをとってもこの作家の将来を保証するに十分だった。細部には荒削りな部分があるものの、それがかえってレオンシオ・プラド校の荒々しい現実に生きる少年たちの姿を引き立てている。単純に「学園もの」のドラマを作り上げるのではなく、そこに複雑なペルー社会、ひいてはラテンアメリカ世界全体の縮図を描き出し、権威主義体制下に横行する虐待、裏切り、密告、搾取、その他様々な問題を浮き彫りにしたところがバルガス・リョサの手腕。ブームの代表作となったこの小説は、現在までラテンアメリカ文学の規範であり続けている。

## ◆マリオ・バルガス・リョサ

リアリズム文学の伝統

### 『世界終末戦争』(1981)新潮社

1969年に『ラ・カテドラルの対話』を発表して以降、70年代は『パンタレオン大尉と女たち』、『フリアとシナリオライター』といったやや見劣りのする作品を書いていたバルガス・リョサは、この『世界終末戦争』で見事な「カムバック」を果たした。エウクリジス・ダ・クーニャのルポルタージュを踏まえて19世紀末の狂信的宗教集団カヌードスの反乱を再現しながら、そこに宗教対立、貧困、政治腐敗、軍国主義など、現代ラテンアメリカに蔓延する社会問題を盛り込む手腕はさすがとしか言いようがない。バルガス・リョサのなかで最も長い作品の一つだが、様々な視点から次々と事件が語られ、長さをまったく感じさせないほどスムーズに最後まで読めてしまうのは技法的習熟の賜物だろう。

## ◆オラシオ・カステジャーノス・モヤ

リアリズム文学の伝統

### 『崩壊』(2006)現代企画室

戦争やクーデター、暗殺や内戦に揺れる激動の中米を背景に、ホンジュラスとエル・サルバドルの二国に跨って展開する『崩壊』は、セルヒオ・ラミレスの『ただ影だけ』と並んで、今世紀の中米文学が生み出した傑作小説と言えるだろう。オラシオ・カステジャーノス・モヤは、ポラーニョやロドリゴ・レイローサと並んでラテンアメリカ文学新世代の代表格。1998年発表の『吐き気』で脅迫電話を受け、以後祖国に戻れぬまま亡命作家となったオラシオは、ドイツ、アメリカ、日本などを転々としながら、エル・サルバドルの激動をテーマとした小説を書き続けている。最新作では内戦突入直前のサン・サルバドルを取り上げており、今後の活動も注目される。

## 2 | カリブ世界と魔術的リアリズム

## ◆ミゲル・アンヘル・アストゥリアス

カリブ世界と魔術的リアリズム

### 『グアテマラ伝説集』(1930)岩波文庫

ノーベル文学賞作家ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの処女作『グアテマラ伝説集』は、ラテンアメリカ文学における「魔術的リアリズム」の出発点。元来実証主義的な文明論者だったアストゥリアスは、シュルレアリスムの美学に触れて新たな視点からマヤ文明を捉えなおし、そこに魅惑の世界を見出した。『ポボル・ブフ』を筆頭に、マヤの神話・伝説体系を精読した上で、これを現代に再現して出来上がったのがこの作品。アストゥリアスは、『大統領閣下』や『緑の法王』など、政治色の濃い作品も多く残しているが、カルペンティエールやガルシア・マルケスに影響を与えたのは、本作のようにマヤの世界観を探求した作品群(ちなみにガルシア・マルケスは『大統領閣下』を「駄作」と酷評した)。ポール・ヴァレリーら、多くのヨーロッパ知識人・芸術家を驚愕させた独特のイメージを素直に味わいたい。

◆アレホ・カルペンティエール

カリブ世界と魔術的リアリズム

『この世の王国』(1949) 水声社

アストゥリアスと同じ時期にパリでシュルレアリスムに触れたアレホ・カルペンティエールは、同じようにアヴァンギャルドとの接触からラテンアメリカ世界、特に黒人社会にの新たな美を発見した。これを文学作品として結実させる契機になったのが、1943年のハイチ訪問。シュルレアリスムのような小細工に頼らずともラテンアメリカには現実世界に驚異の現象が存在する、この「驚異的現実論」をハイチ独立の歴史を辿りながら実践したのが『この世の王国』だった。もちろん、カルペンティエールがただ歴史的な事件を再現したのではなく、実は緻密に文学的手法を駆使していたことは、バルガス・リョサが『嘘から出たまこと』(現代企画室)で論証したとおり。黒人文化との同化に執着し、本当はスイスのローザンヌ生まれなのに生涯ハバナ生まれと偽り続けた(この事実は最近まで知られなかった)カルペンティエールの思いを重ねて読むと、さらに味わい深いかもしれない。

◆ファン・ルルフォ

カリブ世界と魔術的リアリズム

『ペドロ・バラモ』(1955) 岩波文庫

『ペドロ・バラモ』は、いまだにメキシコ人読者の心をくすぐり続ける不朽の名作。恋破れた暴君が破滅させ、靈魂ばかりがさまようようになった死の町コマラは、独裁者の横暴に苦しむラテンアメリカ世界全体の悲劇を暗示している。作者ファン・ルルフォは、「葬式の名人」こと川端康成とも共通する境遇に生きた孤児で、クリステロ戦争の災禍によってゴーストタウンと化したハリスコ州の町の陰鬱なイメージから生涯逃れることができなかった。元来「ささめき」というタイトルがついていただけあって、全篇が死者たちのささめきによって出来上がっており、その独特の構造はしばしば読者を戸惑わせる。読みにくい小説だと指摘されたルルフォは、平然とした顔で三回読めば必ず理解できます、と云ってのけた。短い作品ということもあるが、確かにこの名作を三回読むのも悪くない。

◆ガブリエル・ガルシア・マルケス

カリブ世界と魔術的リアリズム

『百年の孤独』(1967) 新潮社

言わずと知れた現代ラテンアメリカ文学の最高傑作。人種の混濁するカリブ世界を背景にガルシア・マルケスは、「情景描写」を排して次から次へと奇想天外な出来事を語り続けることで独自の魔術的リアリズムを完成した。それまで貧乏生活にあえいでいたガルシア・マルケスはこれで世界的作家にのしあがり、ラテンアメリカ文学の真価を世界中に知らしめた。中心人物のモデルとなったのは、百日戦争を戦い抜いた自由派退役軍人の祖父と、不思議な話を平然とした顔で語っていた祖母。「実体験でない事件は一つとして書いていない」とガルシア・マルケスは言ったことがあるが、回想録『生きて、語り伝える』(新潮社)を読めば、故郷アラカタカで過ごした幼少期の思い出がいかに創作に活かされたかよくわかる。

#### ◆ガブリエル・ガルシア・マルケス

カリブ世界と魔術的リアリズム

##### 『族長の秋』(1975) 集英社文庫

アレホ・カルペンティエール『方法再説』、アウグスト・ロア・バストス『至高の我』、ガブリエル・ガルシア・マルケス『族長の秋』といえば、ラテンアメリカの三大独裁者小説だが、邦訳で読めるのはこの作品だけ。19世紀初頭の独立以来、約二百年にわたってラテンアメリカ諸国は数奇な独裁者を生み出し続けており、数多くの作家がこれをテーマに小説を書いている。そのなかでもずば抜けて読み応えがあるのがこの『族長の秋』だろう。裏切りの嫌疑がかかった腹心を丸ごと料理して部下に振舞い、債務返済のために海を根こそぎ帝国主義国家に売り飛ばす族長の姿は、怪物としか言いようがない。フィデル・カストロと親交を結びながらも、南米の軍事独裁体制には積極的に反対運動を展開したガルシア・マルケスが、この独裁者像から読者に何を訴えたかったのか、じっくり考えてみたいところ。

### 3 | ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

#### ◆アドルフォ・ピオイ・カサーレス

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

##### 『モレルの発明』(1940) 水声社

「あなたの幻に恋したの」といえば、どこかで聞いたことのあるセリフだが、ボルヘスの弟子を自任するピオイ・カサーレスは、島を舞台に据え、人間を寸分違わず三次元的に複製する映像再生機械を「発明」することでこのテーマを美しい幻想文学に仕上げた。創作の出発点となったのはH.G. ウェルズの名作『モロー博士の島』だが、グロテスクな動物人間の代わりに、美しい女性を配して主人公の逃亡者を虜にするあたりが、アルゼンチン文学の美学を映し出していると言えるだろう。「完璧な小説」と絶賛したボルヘスの言葉どおり、まったく無駄のない見事な愛の物語を完成したピオイは、単なるボルヘスの「影」ではなかった。多くのアルゼンチン文学者が味わった「人間の存在を巡る醜劇」を『モレルの発明』の読後に感じられれば、ラテンアメリカ文学をさらに深く味わえることになるだろう。

#### ◆ホルヘ・ルイス・ボルヘス

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

##### 『伝奇集』(1944) 岩波文庫

常に死と消滅の危機に晒される現実世界にあって、言いようもない実存主義的不安に駆られながら生きていたボルヘスは、フィクションの作り出す絶対安全な世界、「バベルの図書館」に避難場所を求めている。ボルヘスといえば難解でとっつきにくい作家というイメージが強いが、作品内で彼が弄する歴史的考察や哲学的思索、そして詭弁の数々に目が眩んでしまうと、表面的にしかその文学世界を理解することができない。字面だけをなぞってわかった気になるのではなく、その奥底にあるボルヘスの形而上学そのものに触れてみたいものだ。そのために参考となるのは、ボルヘスのライバル作家エルネスト・サバトのエッセイ集『作家とその亡霊たち』(現代企画室)に収録された「二人のボルヘス」という論考。これを踏まえて『伝奇集』を読み直してみると、新たなボルヘス像が見えてくるだろう。

#### ◆アウグスト・モンテロッソ

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

##### 『全集 その他の物語』(1959) 書肆山田

グアテマラから亡命してメキシコに移り住んだアウグスト・モンテロッソは、ファン・ルルフォやファン・ホセ・アレオラと親交を結びながら独自の境地を開いていった。フエンテス流のリアリズムに乗るわけでもなく、サルバドール・エリソンドのような実験小説にはしるわけでもなく、諧謔とユーモアで作られた彼の文学世界は唯一無二。『全集 その他の物語』に収録された「恐竜」は特に大きな衝撃を与え、現在に至るまで文壇の語り草となっている。モンテロッソ本人を前にして、「もう「恐竜」はお読みになりましたか？」と訊かれた某有名メキシコ人文芸評論家が、その場凌ぎのために、「ええ、ええ、今読んでいるところですよ」と答えたという有名な逸話が残っている。

#### ◆ホルヘ・ルイス・ボルヘス

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

##### 『創造者』(1960) 岩波文庫

ボルヘスを初めて読むなら、『伝奇集』よりこの『創造者』から入ったほうがいいかもしれない。確かにアルゼンチンの歴史や文化はもちろん、古代ギリシア・ローマ、聖書などについて広範な知識を必要とするものの、短い文章のなかに知的遊戯やアイロニーが凝縮されていて読者を飽きさせない。ボルヘスは短編小説作家であるばかりでなく、優れた詩人でもあったが、その両方を同時に味わえるのが本書の大きな魅力。円熟期に差し掛かった作家の手腕を存分に堪能できるはず。

#### ◆ファン・カルロス・オネッティ

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

##### 『屍集めのフンタ』(1964) 現代企画室

オネッティは、ボルヘスとアストゥリアスに代表される先駆的世代と、ガルシア・マルケス、バルガス・リョサ、フエンテスらに代表される「ブーム」世代との間に挟まれ、生涯を通じて非常に地味な存在であり続けたが、バルガス・リョサはもちろん、ルルフォやコルタサルにも支持されるなど、実は極めて優れた小説作品を残している。なかでも優れているのは、『はかない人生』に始まって『造船所』へと続くサンタ・マリア小説群。その中核を担うのがこの『屍集めのフンタ』であり、『緑の家』とロムロ・ガジェゴス賞を争うなど、発表当初から専門家には高く評価された。売春宿の経営をめぐる教会を中心とする保守勢力に対抗するフンタ、兄を亡くし、その未亡人と関係を持つ「僕」、この二人が絶妙な形で絡み合っていくのが本作の魅力。「文学と不倫した男」オネッティの真髓を芯まで味わいたいものだ。

#### ◆フリオ・コルタサル

ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

『愛しのグレンダ』(1981) 岩波書店

ボルヘスと並ぶアルゼンチン幻想文学の旗手フリオ・コルタサルとくれば、前期の傑作短編集『遊戯の終わり』を推奨したいところだが、残念ながら現在のところ絶版でほぼ入手不可能(数編は岩波文庫『コルタサル短編集』に収録)。日本では後期の短編は十分に紹介されていないが、『通りすがりの男』や『愛しのグレンダ』にも読み応えのある短編が多く含まれている。表題作「愛しのグレンダ」と並んで本書で注目値するのは、「グラフィティ」。60年代半ば以降、人道的左翼作家の立場からキューバのカストロ政府やニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線を支援し、急速に政治活動にのめり込んでいったコルタサルが、「幻想文学と政治」の関係性を追求し続けた末に辿り着いた結論がこの短編。残念ながら翻訳でその味わいがやや損なわれているものの、何度も繰り返し味わいたい作品の一つだろう。

## 4 | 詩集、回想録、エッセイ集など

#### ◆オクタビオ・パス

詩集、回想録、エッセイ集など

『弓と豎琴』(1956) 岩波文庫

これはやや難解な詩論だが、文学を志す者ならぜひとも読んでおきたい一作。シュルレアリスムとの接触から詩作に目覚め、メキシコに戻ってからはメキシコ人としてのアイデンティティ追求と詩作を結びつけて傑作を残したオクタビオ・パスは、このエッセイに詩への情熱と思索のすべてを注ぎ込んだ。『孤独の迷宮』のようなメキシコ文化論や、『曇り空』のような政治論も悪くないが、やはりこのノーベル賞作家の真髄は文学論にある。『泥の子供たち』と併せて読むと多少はわかりやすくなるかもしれない。

#### ◆レイナルド・アレナス

詩集、回想録、エッセイ集など

『夜になる前に』(1992) 国書刊行会

キューバのホモセクシュアル作家レイナルド・アレナスが、エイズに苦しみながらも助手の助けを得て口述筆記で書き上げた衝撃の自伝。独自の感性を育んだ幼少時代に始まって、革命の波に飲まれ、カストロ体制の硬直化とともに厳しい弾圧を受けた後、アメリカに亡命しても最期まで安住の地を見出せなかったその悲劇的生涯が、断片的な形式ながらも生々しく描き出されている。フィデル・カストロを激しく憎悪し、監視の目をかいくぐって男たちの愛を求め、自由を奪われた憤りを創作にぶつけた男の生き様がここにある。ハビエル・バルデム主演の同名映画も併せて見ると、キューバ革命の闇の部分がいつそうよく理解できるかもしれない。残念ながら、小説作品では『夜明け前のセレスティーノ』と『めくるめく世界』しか邦訳されていないが、アレナスの真価が最も発揮された『夏の色』や『襲撃』の翻訳が期待される。

◆ロベルト・ボラーニョ

詩集、回想録、エッセイ集など

『通話』(1998)白水社

ボラーニョといえはすぐにロムロ・ガジェゴス賞受賞作『野生の探偵たち』の名前が上がるが、20世紀前半からのラテンアメリカ詩の歴史を踏まえずしてこの作品を正確に理解するのは難しい。アメリカかぶれの読者には、わかりもしないのに有名批評家の言うことを鵜呑みにしてこの作品を買い被っている輩も多い。素直にボラーニョの真髓を味わいたいのであれば、未邦訳の中編『遠い星』や『チリ夜想曲』、そして短編集『通話』から入るのがベストだろう。背伸びして通ぶることなく、「ウィリアム・バーンズ」、「独房の同志」、「クララ」といった、ユーモアと哀愁に満ちた短編をじっくり味わってほしい。

◆ファン・ヘルマン

詩集、回想録、エッセイ集など

『価値ある痛み』(2001)現代企画室

青年時代から左翼運動に与し、ペロニズムから軍事政権による弾圧、経済破綻まで、激動のアルゼンチン史を生き抜いてきた不屈の詩人ファン・ヘルマンは、現在まで南米中の読者から賞賛を浴び続けている。軍事政権に反対した息子を惨殺され、獄中で産み落とされた孫娘を軍人たちにさらわれても、ヘルマンは軍政反対の声を上げ続け、片時も詩作を止めなかった。息子の遺体発見から、孫娘との劇的な対面に至るまでの、悲痛な思いを綴ったのが本作『価値ある痛み』。決して逆境に打ちのめされることのなかった詩人が繰り出す痛切な、それでいて優しい声にじっくりと耳を傾けたい。

## プラスワン

---

『ラテンアメリカ五人集』集英社

ラテンアメリカ文学を読むのは初めて、という方には、安くて簡単に手に入り、それでいて内容も充実したこの一冊がおすすめ。特にホセ・エミリオ・パッチェーコ『砂漠の戦い』とマリオ・バルガス・リョサ『小犬たち』を読み比べてみると面白いだろう。どちらの作品でも、拡大の一途を辿り続けていた首都の雑踏と混乱のなか、思春期に差し掛かった少年たちがせつない恋の物語を体験する。大人という立場からノスタルジックに昔の物語を振り返る、という点でも二作は共通しているが、パッチェーコがわかりやすい文体ですべてを綴っているのに比べ、バルガス・リョサの作品では語りが錯綜し、文体も凝っている。ラテンアメリカ文学の魅力を対照的な形で凝縮した二作と言えらるだろう。